

台湾現代アートからの眼差し

サンゴは森の夢をみる

2023.12.5 火曜 → 2024.1.14 日曜

《珊瑚會夢見森林嗎？》

無数植物庇護著動物
——在地平線上方
有些動物身體裡藏著植物
——在海平面下方

列車移動
帶來時間的節拍器
和種種凝視
從事物表面回穿到自我的凝視

島有數百萬年的軸度
也有百多年來的鐵路

火車經過平原
帶來文明行進轟隆隆
火車在山林間
串起開發故事嗚嗚-嗚嗚

山谷裡的雨季，萬物聆聽
海面上的陽光無所遮蔽

海裡的珊瑚，還會夢見森林嗎？
獵人的夢中，是否仍有
繡眼畫眉和大頭蒼蠅？

《DO CORALS DREAM OF FORESTS ?》

無数の植物が動物たちを庇護している
——地平線の上の方で
一部の動物たちは体内に植物を潜ませる
——海面の下の方で

電車は突き進む
時を刻むメトロノームは
さまざまな目を留める
それはモノの表面から自己を穿つ
一点の凝視

数百万年の時間軸をもつ、フォルモサ
シマには百数年の歴史を誇る鉄道がある

列車が平野を抜けてゆく
轟音とともに文明が運ばれた
列車が森林の間を駆け抜ける
発展の調べがわぁんわぁんと響きわたった

山間は雨季、万物に耳を傾けよう
きらめく海面の日差しには遮るものもない

海中のサンゴは森の夢をみるのだろうか？
狩人の夢には、まだメジロチメドリやオビキンバエが
飛んでいるのだろうか？

詩作：蔡宛璇



台湾に住む6人のアーティストと高円寺を拠点とする翻訳家によって実現した、グループ展『サンゴは森の夢をみる』は、フォルモサの雅称を持つ台湾の山と海の儂い拡がりを、眼で聴いて耳でみて愉しめる、展覧会となっています。

本展は16ミリフィルムで撮影した台湾鉄道の映像作品をはじめ、先住民が多く暮らす太魯閣(タロコ)の集落で2週間過ごした家族の体験と観察、澎湖(ほうこ)諸島の海に生息するサンゴ礁の音風景、そして星の砂からみたミクロな眼差しを、軽やかにまとめたインスタレーションから構成されています。

彭葉生 ヤニック・ドビ

台湾をベースとするフランス人アーティスト。1998年からフィールド・レコーディングの実践者として、オーディオドキュメンタリーの作曲や実験音楽の制作、台湾の環境問題をテーマとした音のプロジェクトなど、多岐にわたる音楽活動を展開している。近年は、映画やその他アート作品の、サウンドデザインとオーディオ・ポスト・プロダクションを手がけている。

蔡宛璇 ツァイ・ワンシュエン

澎湖生まれのマルチ作家。ミクストメディア・インスタレーション、ドローイング、ビデオ、詩歌など、複数の分野を横断して創作活動に挑んでいる。個人のプロジェクトと平行して、2004年より、サウンドアーティストのヤニック・ドビとの共同製作も行っている。

彭科萌 リシャナッサ・ドビ

12歳のプレティーン。手芸、ミニチュア、合理的に整理されたものに興味を持っている。母語はホーロー語と台湾華語とフランス語。

彭煥希 アリオン・ドビ

9歳の男の子。趣味は動物と手芸。遊び心あるヒト・コト・モノに対して、強い関心を持っている。ホーロー語と台湾華語とフランス語を自由に操る。

黄邦銓 ファン・パンチェン

映画監督。記憶、旅、フィルムといった3つの軸をもとに作品づくりをしている。『Return』と『去年、電車が通った時』は、世界最大の短編映画祭のクレルモン＝フェランのラボコンペティション部門で、2年連続グランプリを受賞。

林君昵 リン・チンニ

建築学科出身の映画監督。とりわけ戦前の日本と台湾の歴史や空間を主体とした作品に力を入れている。2020年以降の代表作に、黄邦銓と共同で製作した『夜明け前の恋物語』、『甘露水』がある。

日中翻訳、メディエーション：池田リリィ 茜藍

企画：NPO 法人劇場創造ネットワーク / 座・高円寺

助成：財団法人國家文化藝術基金會

※展示会場の和訳は台湾華語の原文から編訳したものであり、日本語と英語の記述にズレがあります。

※展示会場のカッティングボードと紹介文は、アーティスト自身が本展のために台湾で制作し持ってきたものです。

Gallery アソビバ初の台湾展を、温かくご高覧いただければ幸いです。

Gallery アソビバ

座 高円寺

國藝會

2

《Alang Skadang》

澎奕希、澎科萌、蔡宛璇、澎葉生 / 2022
by Arion & Lysianassa Dauby, Wan-Shuen Tsai, Yannick Dauby / 2022

ALANG SKADANG とは、「森人」山岳アートプロジェクトを通じて、アーティスト一家が太魯閣国家公园に入って、タロコ族と生活を共にして完成させた作品である。2022年の夏、大同集落(サガタン旧部落)の山小屋に2週間滞在した彼らは、オーナー夫婦の Lmio と Simat と出逢う。ネットも電気も水道もない山での自給自足生活や住民の物語を作品で伝えている。

※「先住民」は台湾華語ですでになくなってしまった人という印象を与えてしまうことから、台湾では自称として「原住民」という呼称が定着している。また彼らは集落のことを、誇りをもって「部落」と言う。

ALANG SKADANG is a work-in-progress in Tarako National Park, Taiwan, among Truku people. Invited by the community project "Tree Tree Tree Person", two artists and two professional children were in residency during the Summer 2022 at the Rainbow Lodge of Skadang village. Lmio and Simat, the two hosts, shared stories and practices of autonomous life in the mountain, where there is no access to the networks such as electricity, water and roads. After the residency, the four-people team created a series of artworks that are exhibited here.

[Informations and audio-visual works :
https://alangskadang.tumblr.com/](https://alangskadang.tumblr.com/)

3

《有孔虫》

Foraminifera

蔡宛璇、澎葉生 / 2018
by Wan-Shuen Tsai & Yannick Dauby / 2018

有孔虫と呼ばれる小さくて奇妙な原生生物は、ヒトを取り巻く世界の感じ方や他の生物に対する理解がどれほど有限的かを明示する。私たちが海辺の砂粒だと思い込んでいる「星の砂」とは、死んだ有孔虫の有機質が分解され、丈夫な殻のみが残った躯体である。

Foraminifera are minuscule and strange organisms, and a very good example of how humans are limited in their perception of the surrounding world, and limited also in their comprehension of other living beings. What appears to most of us as grains of sand are actually fantastic and inhabited architectures.

4

《サンゴに問う》

How Corals Think

澎葉生 / 2017
by Yannick Dauby / 2017

澎湖(ほうこ)諸島は台湾海峡に位置し、豊かな海洋環境を有している。しかし海岸線の変化、過剰な漁業、観光の一般化、そして世界的な気候変動などの環境問題は、生態系に深刻な影響を及ぼしている。地元環境団体や生物学者と協力して、長期的なプロジェクトの一環として、水中でサンゴ礁を記録した作品。これには3つの目標が含まれている: 水中の音を識別する、サンゴ礁の音環境を調査する、環境教育に利用する。2017年に制作された時、サンゴ礁は比較的健康な状態にあった。しかし現在は残念なことに、その大部分が持続的に白化している。

[More informations can be found on the personal website of Y.D. :
http://www.kalme.net](http://www.kalme.net)

1

《東に向かう 212 号列車 - 山側》

Train No. 212 - Mountain side

台湾では、どの方向に向かう列車に乗っても、常に片側が山で片側が海といった光景が、どこまでも続く。それは台湾に住まう人たちの、心の奥にひめた原風景と重なる。

6

《東に向かう 212 号列車 - 海側》

Train No. 212 - Ocean side

No matter which direction's train you take in Taiwan, you will always see mountain on one side and ocean on the other side, this is in everyone's inner landscape.

林君昵、黃邦銓 / 16mm / 2023
by Lin Chunni & Huang Pang-Chuan
16mm / 2023
train window design
by Arion & Lysianassa Dauby

8

オープニング上映作品

《煙に沈む》

Yen Yen

林君昵 / HD / 12min / 2014
by Lin Chunni / HD / 12min / 2014

9

オープニング上映作品

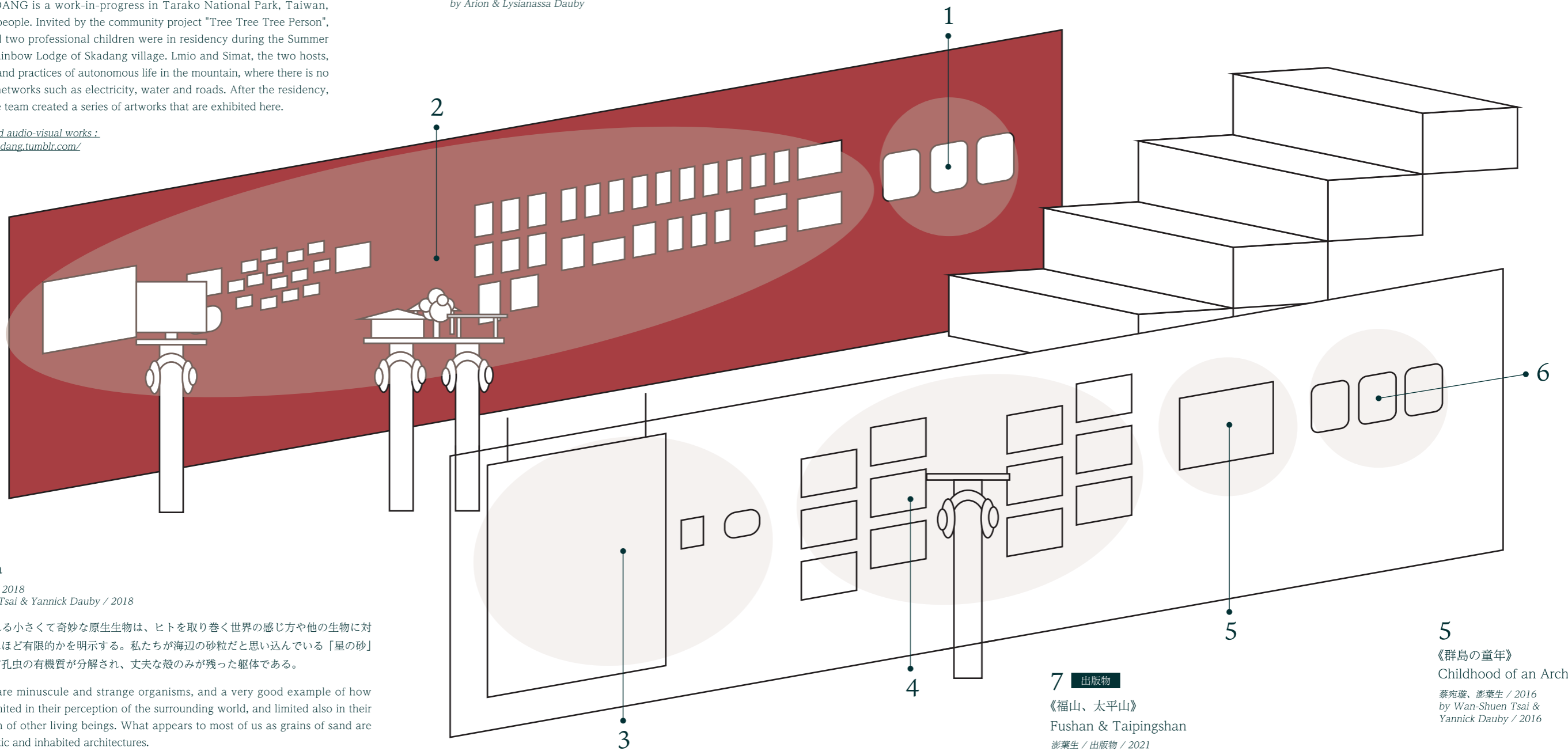
《去年、電車が通ったとき》

Last Year When The Train Passed By

黃邦銓 / 8mm / 17min / 2018
by Huang Pang-Chuan / 8mm / 17min / 2018

台湾本島と南東沖の孤島の蘭嶼(らんしょ)で撮影された作品。海水浴を楽しむ若者たちは、水中でタバコを吸おうと無謀なチャレンジへと突き進んでしまう。そうしているうちに、熱帯の海を夢みる旅が始まった。なぜ私はここにいるのか? はたしてこれは夢、幻か——?

列車から撮影した家々の写真を持って、同じ場所を再訪する監督。「去年、電車があなたの家の前を通ったときに撮った写真です。その時、あなたは何をしていましたか?」と、家の主たちに一年前の出来事をインタビューして回る。果たして彼らは去年のあの日あの時のことを覚えているだろうか?



7

出版物

《福山、太平山》

Fushan & Taipingshan

澎葉生 / 出版物 / 2021
by Yannick Dauby / Publication / 2021

ヤニック・ドビが2013年から2015年までの間に記録した、台湾北東部の環境音集。動物たちが発する音を記録することで、その行動や生息環境をも掘りあげている。また、太平山と深く関わってきた人たちの個人的な経験が台湾華語と英語で綴られており、ヤニック自身によるレコーディング・ノートや、動物種の具体的な登場時間が識別できる表も掲載されている。

Sounds and stories of low and middle altitude forests of Yilan, North East of Taiwan.

This book (in English and Chinese) features recording of voices of animals and their environments in Fushan Botanical Garden and Taipingshan Forest Area between 2013 and 2015 and interviews with some people who have special knowledge and experience about the forests of Taipingshan and Fushan: biologist, Atayal indigenous elder, journalist and activist, forest ranger. Also included, some notes about listening and sound recording practices and the identification of animal sounds.

[Sounds of this publication can be listened freely at this address :
https://kalme.bandcamp.com/album/fushan-taipingshan](https://kalme.bandcamp.com/album/fushan-taipingshan)

5

《群島の童年》

Childhood of an Archipelago

蔡宛璇、澎葉生 / 2016
by Wan-Shuen Tsai & Yannick Dauby / 2016

Penghu archipelago is located in the Taiwan Strait and features a rich marine environment. Or maybe shall we said it featured, in the past tense? Man-made environmental threats such as transformations of the seashores, overfishing, mass tourism and global climate change are present here.

In collaboration with local activists and biologists, sound recordist Yannick Dauby develops his own techniques to collect the sounds of marine wildlife, in a long-term process, with three aims in mind: identifications of underwater sounds, acoustic survey of the reefs and education. The essay "How Coral Think", was written in 2017 when the coral reefs were still in a healthy conditions. But nowadays, very unfortunately, corals communities have been bleaching and dying in growing number.